

付加詞条件再考

著者	佐藤 直人
雑誌名	言語科学論集
巻	2
ページ	61-72
発行年	1998-11-20
URL	http://hdl.handle.net/10097/30707

付加詞条件再考

佐藤 直人

キーワード：付加詞、付加詞条件、演算子抽出、VP付加副詞節、ガノ可変現象

要 旨

日本語を対象として、付加詞条件の記述的妥当性について検討する。副詞節の中には演算子抽出に対して付加詞条件の効果を示さないものがある。その副詞の類がVP内に生起するという特徴で自然類を成すことから、付加詞条件と呼ばれていたものを別の一般化にまとめ直す必要性があることを論じる。

1. 序

付加詞条件は付加詞からの可視移動 (overt movement) による演算子抽出を禁ずるものである。この条件の記述的妥当性の下で、この条件について Huang (1982), Chomsky (1986) などによって普遍文法の原理からの導出が試みられている。

本稿は日本語を対象にして付加詞条件の記述的妥当性を再検討するものである。この言語には、付加詞でありながら演算子の抽出に関して付加詞条件違反の逸脱性を全く示さないものがある。この副詞節の中には付帯状況のナガラ節などが含まれるが、これらはVP内に付加する副詞節(以下「VP副詞節」と呼ぶ)であるという性質によって自然類としてまとめることができる。これに基づき、次のように付加詞条件の修正を行うならば

(1) VPの外側にある付加詞が付加詞島を形成する

「付加詞」という項目がある種の島 (island) の特徴付けとして適当ではなく、それゆえ本稿は、少なくとも日本語においては別の記述的特徴付けが必要であることを書き留めて置くものである。

2. 付加詞からの演算子の抽出

2節では付加詞からの演算子の抽出についての観察を示す。演算子の抽出の効果を調べるために、Kikuchi (1989) によって演算子移動が関わりと分析された比較

削除構文を用いる。まずはじめに Kikuchi の議論の要点を振り返ることにする。

2. 1. 比較削除構文

WH移動を典型例とする、演算子移動一般に見られる特徴 (Chomsky 1977) が観察されることから、Kikuchi (1989) は日本語の比較削除 (comparative deletion) 構文について、この構文に音声的に空の演算子の移動が関わりと分析した。その特徴の各々について言うと、日本語の比較削除構文は i) 必ず空所 (gap) を持ち、同一の名詞や、可視的代名詞が空所の位置に生起することはできない (2a), ii) 表面的には非有界性 (unboundedness) を示す (2b), iii) 空所と、それと同一指示の量化子の依存関係は複合名詞句制約 (complex NP constraint) 等の下接条件 (subjacency condition) に従う (2c), iv) Saito and Hoji (1983) の弱交差 (weak crossover) 現象に対する一般化 (3) が正しいと仮定した上で、(2d) のような比較削除構文で弱交差現象の逸脱性が見られる、ということが挙げられる (以下の例文中「e」は空所を表わす)。

- (2) a. トムは[ジョンが (e / *それら / *本) を読んだよりも] 本をたくさん読んだ (Kikuchi 1989, (12))
 b. [[[ジョンが e 読んだと] 言われていると] 皆が思っているよりも] メリーはたくさん本を読んだ (ibid., (13))
 c. *[[その机で e_i e 読んでいた] 人を_i ジョンが殴ったよりも] ポールはたくさん本を読んだ (ibid., (14))
 d. *[[自分達が_i 落第したことが] e_i 驚かしたよりも] はるかにたくさんの学生をビルが落第した (ibid., (18))
- (3) A variable cannot be the antecedent of a pronoun or and anaphor that it does not c-command. (Saito and Hoji 1983, (30))

本稿では Kikuchi の分析を正しいものと仮定し、比較削除構文を用いて副詞節からの演算子摘出を示すことにする。

ところで Kikuchi は、付加詞条件から演算子を摘出した例についても観察している。(4) がその例である。

- (4) a. *[[ジョンが e 読んでいた時に] 地震が起きたよりも] ポールははるかにた

くさん本を読んでいた (Kikuchi 1989, (15))

b.*[皆が[ポールがe 読んだ後で] 散歩に出かけたよりも]ジョンはたくさん本を読んでいた (ibid., (26))

しかし「時」「後」は統辞範疇は NP であり、そのため複合名詞句制約の関与を考察に入れなければならないだろう。そのため、付加詞条件からの摘出の効果を純粹に取り出して見るのにふさわしいとは言えない。とはいえ副詞節のうちのどれが名詞節であるかは自明ではなく、またそれ以上の事情も絡んでくる。

ここで名詞節であるかどうかを判定するために、ガノ可変現象を基準にして考えてみよう。三上 (1959) が観察したガノ可変現象は関係節、コト補文では一般に観察される。

- (5) a. 太郎が会った人 – 太郎の会った人
b. 太郎が来たこと – 太郎の来たこと

ここでは柴谷 (1978: 250) を元に、この現象は N が支配 (dominate) する CP 内で起こると考えることにする。ただし、井上 (1976) が観察しているように、トイウを持つ埋め込み節内ではガノ可変現象は見られない。

- (6) 太郎が生きているという噂 – *太郎の生きているという噂

副詞節では、主格を持っていると期待される NP を属格で置き換えた場合、容認不可能となるもの (7) と、三上 (1959:45) が観察しているように、ガノ可変が観察されるもの (8) がある。

- (7) a. 太郎が来るので – *太郎の来るので
b. 太郎が来ると – *太郎の来ると
(8) a. 結果がわかるまで – 結果のわかるまで
b. 火がついたように – 火のついたように

「副詞」というのはむしろ機能名であり、統辞的範疇ではないので、副詞類の中に範疇 N のものが存在し得る。それゆえ (8) の様な例では節補部が NP 節点に支配されていても不思議ではない。

ここでは、複合名詞句制約が関与する為に付加詞条件の効果の有無が見えなくなる恐れがあることを考慮に入れればよい。(6) でみたように、NP 節点に支配された節内ではガノ可変が起こらない場合もあるが、起こらない名詞-補部構造の場合について言えば、Kikuchi の言うように、逸脱性は観察されない。

- (9) [皆が [ボールが e 読んだという噂を] 信じているよりも] ジョンはたくさん本を読んでいた (Kikuchi 1989, (23))

以上の観察は次の関係 (10) にまとめることができる。含意関係が一方向であることに注意されたい。

- (10) 複合名詞句島を形成する \Rightarrow ガノ可変現象が見られる

逸脱性は、もちろん、複合名詞句制約の違反だけによってだけ引き起こされるのではない。かと言って付加詞条件違反だけによって引き起こされるのでもない。それゆえ逸脱性が観察されることからそれがどのような条件に規制されて起こったものかを判断することはできない。しかし、複合名詞句制約が起こる時に必ず観察されるガノ可変が観察されることから、他に関与する条件が考えられない時には、その逸脱性が複合名詞句制約によって引き起こされたとするならば最良に説明される。後に見るように (4) に含まれる副詞節内ではガノ可変が観察される。この問題は 4 節でもう一度別の文脈で立ち戻る。

2. 2. 付加詞条件効果

それでは比較削除構文を用いて、付加詞からの演算子摘出の効果を見ていくことにしよう。多くの副詞節について、付加詞条件の予測に合致する経験的証拠を得ることができる。

- (11) *太朗は [[部下が e 殴ったので] 次郎が責任をとって会社を辞めたよりも] はるかにたくさんの役員を殴った
- (12) *太朗は [[部下が e 殴ったのに] 次郎が会社に留まったよりも] はるかに少数の役員を殴った
- (13) *太朗は [[部下が e 売ってきたら] 次郎が社長賞をもらうよりも] たくさんの車を売った

- (14) *太郎は [[e 挨拶もせずに] 次郎が韓国に来たよりも] たくさんの先生に挨拶しなかった

しかしながら、検証する副詞節の領域をさらに広げると、付加詞条件の予測に反し、逸脱性が全く感じられない例が観察される。

- (15) 太郎は [次郎が [e 使いながら] 授業をしたよりも] たくさんの教科書を使った
 (16) 太郎は [次郎が [e 入り口に置いて] 盗みに入ったよりも] 多くの見張りを置いた
 (17) 太郎は [次郎が [e 借りたまま] 会社をやめたよりも] たくさんのお金を会社から借りている
 (18) 太郎は [次郎が [e 買いに] 国際市場まで出かけたよりも] たくさんの野菜を亀浦市場で買った

この観察を妥当なものであるとして話をすすめよう。但し、これらの例が容認可能であることが即ち付加詞条件に対する反例となるかということそうではない。これらは疑似反例であるという可能性もある。目下問題としている対象が付加詞条件が関与する構造記述に合致し、かつ付加詞条件がその適用に課せられるというような演算子移動が存在しなければならない。

演算子移動に関しては、本稿で採用している Kikuchi (1989) の比較削除構文の分析の妥当性に依存している。ここでは既に述べているように Kikuchi の分析を正しいものと仮定する。では演算子がそこから摘出される副詞節について考えた場合、それは付加詞条件の構造記述に合致するのであろうか。

ここで「問題」が生ずる。目的の二節について Miyagawa (1987) が、ある種の動詞に隣接した環境で動詞とともに再構造化 (restructuring) を受ける、という分析が提案されているが、ここでは Miyagawa の分析を正しいと仮定しよう。その「問題」は、付加詞条件の予測する逸脱性を示さない例の中に、まさに、目的の二節も含まれているということである。もし逸脱性を示さない二節は隣接する動詞とともに再構造化規則が適用され、それによって副詞節の付加詞境界が演算子を移動する演算子によって見えなくなっているとすると、ここで取り上げた例は付加詞条件の構造記述を満たさず、それゆえ (15) - (18) は疑似反例となる。以上のことは二節以外の副詞節にもあてはまる (ナガラ節などにも再構造化規則が適用

されるということが事実であれば、それは別の興味深い問題となるであろうが)。

第3節では副詞節の内、ナガラ節、二節が実際に付加詞条件の反例であるかどうかを再構造化の観点から検討する。

3. 再構造化の可能性

Miyagawa (1987) は (19) の様な例において、副詞節と思われる二節が現われているにも関わらず、複文ではなく単文のような振る舞いをするという現象を観察している。(19a) のように主節の副詞句が補文内に生起した例は容認不可能であるのに比して、(19b) では二節内にあるように見えるのであるが、完全な容認性を示す。

- (19) a.*太郎が[華子が車を双眼鏡で盗んだの]を見た (Miyagawa 1987, (3b))
b. 太郎が神田に本を自転車で買いに行った (ibid., (5a))

また、NPシカは同一節内に否定辞が存在する環境にしか生起できない (20a) のであるにも関わらず、二節内に NP シカが生起しているように見え、否定辞は主節に存在している (20b) はまた、完全な容認性を示す。

- (20) a.*僕が[太郎がピザしか食べるの]を聞かなかった (ibid., (7b))
b. 華子が図書館に雑誌しか借りに行かない (ibid., (8a))

Miyagawa は (19b), (20b) のような例では再構造化規則が適用されていると分析した。

ここで、付加詞条件違反を示さない副詞節について再構造化規則が適用される可能性について検討してみよう。ナガラ節の場合、たとえ動詞に隣接した環境であっても副詞句がナガラ節内に生起することは許されず、またナガラ節内のNPシカを主節の否定辞と結ぶことはできない。

- (21) a.*太郎は[教科書を大声で使いながら]授業していた
b.*太郎は[新しい教科書しか使いながら]授業しなかった

このことから、ナガラ節は節としての地位を保っていることができ、それゆえ再構造化の適用を受けているとは考えられない。

再構造化規則が適用され得る二節でも、動詞に隣接していない場合には二節は節境界を保持するのであった。

- (22) a.*太郎が本を自転車で買いに神田に行った (ibid., (6a))
 b.*華子が雑誌しか借りに図書館に行かない (ibid., (9a))

しかし、演算子抽出に関しては、たとえ動詞に隣接していない環境、すなわち再構造化規則適用に課せられる隣接性条件を満たさないという環境であっても、付加詞条件の効果を示していない。(18)を(23)として再掲する。

- (23) 太郎は[次郎が[e 買いに] 国際市場まで出かけたよりも] たくさんの野菜を亀浦市場で買った

まとめると、ある種の副詞節は付加詞条件の効果を示さないのであるが、その副詞節は節の地位を保ったまま演算子の抽出を許すのであり、すなわち再構造化は適用されておらず、この限りでこの種の副詞節は付加詞条件効果に対する反例と考えて良いだろう。

4. 付加詞条件修正案

では、付加詞条件違反の逸脱性を示さない副詞節はどのような形で自然類にまとめられるであろうか、または付加詞条件違反を示す副詞節はどのような形で自然類にまとめ直されるのか。

本稿では逸脱性を示さない副詞節はVP内に生起し、演算子の抽出に関して逸脱性を示す副詞節はVPの外に生起するという特徴付けを提案する。これは次のような観察に基づく。

付加詞条件違反の逸脱性が見られない副詞節は、それを含む自動詞文からヲ使役文を作ることができ、付加詞条件違反を示す副詞節はそれを含む自動詞文からヲ使役文をつくることができない。再帰代名詞「自分」の先行詞の可能性がそれを示す。

- (24) a. 太郎_iが[自分_iの過失で事故を起こしたので] 警察に出頭した(こと)
 b. 芳雄は太郎_iを[自分*_iの過失で事故を起こしたので] 警察に出頭させた
 (25) a. 太郎_iが[自分_iの過失ではなかったのに] 警察に出頭した(こと)

- b. 芳雄は太郎_iを[自分*_iの過失ではなかったのに]警察に出頭させた
- (26) a. 課長_iが[自分_iの部下が事故を起こしたら]辞職する(こと)
- b. 芳雄は課長_iを[自分*_iの部下が事故を起こしたら]辞職させる

これらは二使役文では全て、再帰代名詞「自分」の先行詞として被使役者をとることができる。

- (27) 芳雄は太郎_iに[自分_iの過失で事故を起こしたので]警察に出頭させた
- (28) 芳雄は太郎_iに[自分_iの過失ではなかったのに]警察に出頭させた
- (29) 芳雄は課長_iに[自分_iの部下が事故を起こしたら]辞職させる

これに対して、付加詞条件の逸脱性を示さない類はヲ使役文の補部内に生起可能である。

- (30) a. 太郎_iが[電車の中で自分_iの論文を書きながら]東京に行った(こと)
- b. 芳雄は太郎_iを[電車の中で自分_iの論文を書きながら]東京に行かせた
- (31) a. 太郎_iが[自分_iの車を運転して]東京に行った(こと)
- b. 芳雄は太郎_iを[自分_iの車を運転して]東京に行かせた
- (32) a. 太郎_iが[自分_iの子供を家に置き去りにしたまま]買い物に出かけた(こと)
- b. 芳雄は太郎_iを[自分_iの子供を家に置き去りにしたまま]買い物に出かけさせた
- (33) a. 太郎_iが[自分_iの服を買いに]国際市場に出かけた(こと)
- b. 芳雄は太郎_iを[自分_iの服を買いに]国際市場に出かけさせた

以上の観察は次のようにまとめることができる。

- (34) ヲ使役文の補部に入らない付加詞が付加詞島を形成する

ところで、ヲ使役文の補部に入れるにも関わらず、予測に反して付加詞条件違反の効果をしめすものがある。アトデ節、トキニ節、ズニ節はヲ使役文の補部にあることが照応形「自分」の照応関係から確かめることができる。

- (35) a. 太郎_iが[自分_iの論文が書き上がった後で/時に]旅行に出かけた
 b. 芳雄は太郎_iを[自分_iの論文が書き上がった後で/時に]旅行に出かけさせた
- (36) a. 太郎_iが[自分_iの休暇をとらずに]華子に手伝った
 b. 芳雄は太郎_iを[自分_iの休暇をとらずに]華子に手伝わせた

これらは既に(4), (14)として示したとおり, 付加詞条件の予測に合致するのである。しかし(34)との関連で(4a)と(14)を考えるためには, これらの例文がいずれにせよ必要となるような, 付加詞条件以外の条件が関与していないことが明らかでなければならない。

まず(4)の例を取り上げることにしよう。以下に(37)として再掲する。

- (37) a.*[[ジョンがe読んでいた時に]地震が起きたよりも]ポールははるかにたくさん本を読んでいた
 b.*[皆が[ポールがe読んだ後で]散歩に出かけたよりも]ジョンはたくさん本を読んでいた

既に述べたように「時」「後」の統辞的範疇はNであると考えられる。このことはトキニ節, アトデ節の内部でガノ可変現象が観察されることから裏付けられる。

- (38) a. 太郎が来た時に – 太郎の来た時に
 b. 太郎が帰った後で – 太郎の帰った後で

2.2. で見たように, 複合名詞句島とガノ可変現象との間には, (11)の関係があると述べた。以下に(39)として再掲する。

- (39) 複合名詞句島を形成する ⇒ ガノ可変現象が見られる

(39)によって, ガノ可変現象が観察されることが, その副詞節が複合名詞句島を形成することを意味しない。しかしこのことが(4)の逸脱性が付加詞条件違反に由来することを意味しないのはもちろんのことである。つまり(4)は i) 付加詞条件が関わる可能性, ii) 複合名詞句制約が関わる可能性, iii) そのどちらも関わ

る可能性の3通りが存在し、経験的にはこのうちのいずれかを選択することはできない(ただし、現在のところ、付加詞条件かつ/または複合名詞句制約以外の関与は考えられないとすると、いずれも関わっていないという可能性を選択した場合、この逸脱性を説明するために余分な仮設を必要とするという望ましくない事態を招くことを記しておく)。このような状況では、目下問題としている一般化が成立し、逸脱性は複合名詞句制約に帰せられる、とするのが概念的に優れている。

また、ママ節は「お金のないまま」のようにガノ可変を示すにも関わらず、(17)で見たように、逸脱性は観察されない。(39)の逆の含意が成立しない類、すなわち名詞-補部構造からの演算子摘出は、たとえガノ可変が観察される類であっても逸脱性を示さないのもママ節がこの類であるという説明ができる。すなわち、複合名詞句制約の効果がないママ節では逸脱性がないため、上述の論の傍証となるであろう。

次に(14)の例を取り上げよう。「ずに」という配列から、ここに文語の否定辞由来の形態素が存在することは明白であり、かつズニ節内部で負極偏向表現(negative polarity item)が認可されることからこれもこれが否定辞の資格を備えていることが確認できる。

(40) 太郎は[何も言わずに]部屋を出ていった

演算子摘出を受ける副詞節内に否定辞が存在するということは、Ross (1982)の節内島(inner island)が関与している可能性を示唆する。Rossは節内島からの抜き出しは付加詞の場合にのみ逸脱性を示すとしているが、項の抜き出しであっても容認性の低下が見られる。

(41) *太郎は[次郎が[三郎がe招待しなかった]と主張した]よりもたくさん
の上司を招待した

このことから、ズニ節からの摘出に関しては節内島からの摘出による逸脱性であると考えられるかもしれない。

ここまでの議論をまとめよう。ヲ使役文の補部内に生起し得る副詞節の中にも付加詞条件の予測に合致するものがある。しかし、これらの副詞節はどのみち必要とされる複合名詞句島、節内島の構造記述に合うものであり、たとえ付加詞条

件の違反は引き起こしていないとしても文法が排除するはずのものである。それゆえ観察としては容認不可能なものであっても、(34)の言明に対する反例とはなり得ないものである。

ここでVP内主語仮説(Kuroda 1988, Sportiche 1988 など)を採用しながら、自動詞から派生されるヲ使役文はVPを、ニ使役文はIPを補部にとる(黒田 1996 (講義))と仮定する。(34)が観察的に妥当であるならばヲ使役文の構造に関する仮説と連動して次の記述的一般化が得られる:

(42) VPの外側にある付加詞が付加詞島を形成する

しかし、これを一般化と見るには如何にも奇妙に映る。付加詞条件の特徴付けの条項である「付加詞」のうち、真部分集合だけが付加詞条件を特徴付けるのである。この「付加詞」という条項が島の定義に必要なのではないのではないか、という問題を喚起するに十分である。

5. 結語

本稿では付加詞条件を、副詞節のうちのVP外に付加したものに限るように修正した。これはVP内に生起する副詞節について、そこから演算子を摘出した場合に付加詞条件の予測する逸脱性が観察されないためであった。このことは、少なくとも日本語については、付加詞という形式的特性は島の形成に関与しないのではないかという疑問を生む。

日本語では演算子摘出に関して主語と目的語の非対称性がないことが報告されており(Saito 1985, Kikuchi 1989 など)、このため今のところVP外に生起する要素からの演算子摘出に関する経験的領域は付加詞を除き不明である。しかし英語等の言語では主語からの演算子摘出では逸脱性を示すことから、cross-linguisticな観点に基づいて(29)から付加詞という条項を削除し、VPの外にある要素が島を形成するという一般化が可能かもしれない。ただし主語条件が課せられる言語、例えば英語ならば英語という同一の言語で(42)の一般化が成り立つ限りにおいてであるが。この方向を推し進めるには十分な検証が必要であり、本稿の手に余る。

参考文献

井上和子. 1976. 『変形文法と日本語 上』大修館書店.

- 黒田成幸. 1996. 東北大学に於ける講義.
- 柴谷方良. 1978. 『日本語の分析』大修館書店.
- 三上章. 1959. 『現代語法序説—主語は必要か—』刀江書院 (復刊 1972. 『続・現代語法序説—主語廃止論—』くろしお出版).
- Chomsky, Noam. 1977. "On WH-movement." in Culicover, Peter, Thomas Wasow and Adrian Akmajian(eds.), *Formal Syntax*, Academic Press, New York.
- Chomsky, Noam. 1986. *Barriers*. MIT Press, Cambridge, Mass.
- Huang, Cheng-Teh James. 1982. "Logical Relations in Chinese and the Theory of Grammar." Doctoral Dissertation, MIT.
- Kikuchi, Akira. 1989. "Comparative Deletion in Japanese." ms., Yamagata University.
- Kuroda, Sige-Yuki. 1988. "Whether we agree or not: A Comparative Study of English and Japanese." in Kuroda, Sige-Yuki. 1992. *Japanese Syntax and Semantics*. Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.
- Miyagawa, Shigeru. 1987. "Restructuring in Japanese." in Imai, Takashi and Mamoru Saito (eds), *Issues in Japanese Linguistics*. Foris, Dordrecht.
- Ross, John Robert. 1967. "Constraints on Variables in Syntax." Doctoral Dissertation, MIT.
- Ross, John Robert. 1984. "Inner Islands." *BLS* 10, 258-265.
- Saito, Mamoru. 1985. "Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical Implications." Doctoral Dissertation, MIT.
- Saito, Mamoru and Hajime Hoji. 1983. "Weak Crossover and Move α in Japanese." *Natural Language and Linguistic Theory* 1, 245-259.
- Sportiche, Dominique. 1988. "A Theory of Floating Quantifiers and Its Corollaries for Constituent Structure." *Linguistic Inquiry* 19, 425-449.